

特集

# 看護師の 言葉と態度

子どもと家族の立場を思いやる気づかい力

特集にあたって

## 病気や障がいがある子どもと家族の安心感のために 看護師に求められる“ちょっとした配慮”とは； 看護師の気づかい力向上をめざして

筆者が新人看護師だったころ、子どもと家族から厚い信頼を得ていた先輩看護師がいた。その先輩は、筋ジストロフィーの子どもの手にナースコールを握らせるたびに「押してみて。ちゃんと鳴るか確認するね」と言って、その子どもが本当にナースコールのボタンを押すことができるのかどうかをそのつど確認していた。ナースステーションでその子が押したコールが聞こえることを確認すると、「これで安心だね」と言って、子どもと笑い合っていた。別の日には、初めてのショートステイを終えて帰る親子を病棟玄関まで見送りに行き、「また元気な顔を見せてね」と言い、病棟を後にする親子がエレベーターに乗って見えなくなるまで手を振って見送っていた。また、病棟の看護師や医師、コメディカルスタッフからも信頼され、ナースステーションや休憩室などで相談を受けている場面をよく目にした。時には真剣に、時には笑い声を交えて、子どもと家族のケアについて話し合っていた。

子どもと家族や、ほかのスタッフに対するこのようなかわり方について、その先輩看護師は、「本当にちょっとしたことなのよ。ちょっとしたことでお互い(子ども・家族と看護師、看護師同士、もしくは看護師とほかのスタッフ)が安心したり、心地よくなったりするのだと思う」と筆者に教えてくれたことを今でも鮮明に覚えている。

病気や障がいがある子どもとその家族は、ある日突然訪れた思いもかけないような混沌とした暗闇のなかで苦しみ、悲しみ、怒りで満ちあふれていることが多い。だからこそ、そのような状況にいる子どもと家族にかかわる看護師に求められる基本的な看護の技として、“気づ

かい力”があるのではないかと考える。この“気づかい力”とは、「子どもと家族を思いやる、ちょっとした配慮」のことである。前述した先輩看護師が実践していた技は、まさに“気づかい力”であったといえる。この“気づかい力”があるからこそ、病気や障がいがある子どもと家族に寄り添うことができ、子どもと家族の安心感につながるのではないだろうか。

“気づかい力”は暗黙知のなかで行われている技である。そのため、“気づかい力”を身につけるためには、モデルナースとなる先輩看護師の背中(すぐれた看護技術はもちろんのこと、態度や言葉や表情、そして看護を行ううえでの思考過程など)を見て感じて学ぶということが多かったように思う。

そこで本特集では、さまざまな場面の具体的なエピソードをとおして「こういう場面では、このような気づかひが必要である」「この場面では、このような態度や声かけを行うことはふさわしくない」「“ちょっとした配慮”とは、具体的にはどのようなことなのか」など、なかなか言語化されてこなかった看護の“気づかい力”の実践事例を紹介する。小児看護にかかわる看護師の“気づかい力”が向上することで、子どもや家族とより深い信頼関係が構築され、看護師自身も小児看護のやりがいや楽しさを発見する一助となることを願う。

心身障害児総合医療療育センター-整肢療護園看護主任  
小児看護専門看護師

仁宮真紀 Ninomiya Maki